自転車でひろげる地域活性の輪

「日本で一番走る環境の整った場所であると思っています」と語るのは、創部から47人の全国チャンピオンを育てた鹿屋体育大学自転車競技部の黒川監督。

第1回の207人から今年は811人と右肩上がりに参加者が増えているサイクリングイベント「ツール・ド・おおすみ」は、大隅の雄大な景色、温かいおもてなしに触れ、リピーターや口コミによる参加者が増加しています。

地域活性化の一助にと始まった同イベントは、今年で14回目を数え、考えに共鳴したボランティアスタッフは300人を超えています。

親子で参加していた今回2度目の出場となる南大隅町の瀬戸口健さんに話を聞くと、「交差点には交通整理のスタッフが多く子どもと一緒でも安全に走れることが魅力です」と話してくれました。

午前6時30分

第14回ツール・ド・おおすみ当日。北は北海道から南は沖縄まで全国から集まった自転車愛好家が、まだ暗さの残る早朝から受付を開始。大会を待ちわびた参加者は、スタートに向けて入念なストレッチと愛車の点検、そして自転車で知り合った全国各地の友人との談笑に花を咲かせます。

午前8時40分

待ちに待ったスタートの号砲とともに、Aコース南大隅路ロングライドコースの参加者419人が本土最南端の佐多岬に向けて出発。先導車の後ろにバイクが続く様はプロレースのよう。先頭は鹿屋体育大学自転車競技部の石橋学選手（U-23全日本タイムトライアルチャンピオン）や徳田鍛造選手（U-23全日本ロードチャンピオン）が道中を引っ張り、鹿屋体育大学の選手が最後尾まで参加者に話し掛けながら危険がないように一緒に走行します。

午後0時10分

南大隅町の浜尻展望所を一周し、高低差約200mはあろうかという山道を駆け上がり、ようやく昼食会場の大泊小学校跡に到着。お弁当のほか、作り立てのコロッケや焼き立てのウィンナー、蜂蜜につけたレモンなどがテーブルにずらっと並びます。昼食後は、世界選手権代表の清水都貴選手らメインゲストと写真撮影をする人、ぎりぎりまで休憩を取る人など各々が後半の道中に備えます。

午後0時30分

ゴールの霧島ヶ丘に向けて出発。ロード後半の難所は、大浜海岸までアップダウンの続く坂越え。「がんばれ」「もう少しで下りだぞ」と言ったスタッフの声援に選手は元気付けられ、一歩また一歩とペダルを踏み出します。

午後2時28分

先頭がゴールに到着。続々と後続の選手が続きます。ゴール後に芝生に寝転がる人、友人と健闘を称えあう人など、5時間以上かけて走りきった参加者の顔には疲労の色がありありと見えますが、それ以上の達成感・充実感に包まれていました。

「プロレーサーやトップレベルである鹿屋体育大学の学生と一緒に走ることができるのはツール・ド・おおすみの最大の魅力。また、気の利いた案内や手作り感のある料理も楽しみ。来年も参加し、大隅を楽しみたい」と話してくれたのは、北海道から訪れ今年で4回目の参加となった石田憲久さん。

5月の企画運営会議に始まって様々な打ち合わせや説明会、コースの試走や会場の設営、安全を祈っての祈願祭など6か月かけてスタッフ・地域が一体となって作り上げる「ツール・ド・おおすみ」。

黒川監督は「選手・裏方がしっかり支えてくれるイベント。アンケートでもボランティアへの満足度は高い。大隅全域に新しいコースを取り入れる等今後も日本一の環境である大隅半島の魅力を全国の皆さんに知ってもらいたい」と話してくれました。